

野呂介石傳の研究 (二)

森 銑 三

七

以後數年間は家譜略年譜共に何等の記載もないが、文化三年介石六十の歳には、「文化三寅年三月十日、新御番格被仰付、勤方は迄之通」と家譜にあり、更に「竹石來訪、贈以畫山水」と略年譜にある。

但しこの略年譜の記載には、些か疑問がないでもない。それはこの年八月十五日に、竹石は郷里讚岐國高松に於て、五十歳にして歿してゐるからである。尤も春夏の候に介石を訪うて、歸國後間もなく病歿したとすれば、解釋が附かぬではないが、しかしその歿する數月前に紀伊に在つたといふ事實については、私は他に知るところがないのである。或はこの年文化三年に介石を訪問したといふのは、文化元年に訪問したのが誤載せられたのではなかつたか。五山堂詩話に據れば、その卷二の中に、「竹石以癸亥出都、畫名大起、明年歸郷、未幾沒」としてあり、更にその先に、「余甲子歲、尙寓伊勢、竹石歸途見訪客居、自此一別、遂成永訣」としてある。すなはち竹石

は享和三年癸亥に江戸に出で、翌文化元年同地を辭し、途中伊勢に菊池五山を訪うて歸國してゐるのであるが、伊勢より更に紀伊に入つて、和歌山に介石を訪うたのではなかつたかと思はれて來るのである。但しこの點はなほ疑問にしておきたい。

竹石は長町氏である。竹田はその山中人饒舌の中に竹石と介石とを並稱して、「讚人竹石、紀人介石、名最著世、目爲二石、然其所作不同、竹石以駘宕蒼潤爲主、介石以疎逸曠淡爲宗、余於二石、各有所取」といつてゐる。但し介石は、竹石より贈られた畫を特に認めなかつた。それは米法の山水であつたが、竹石はまだ米氏の意を自得せぬらしいといつたことが四碧齋畫話に見えてゐる。

介石のこの年の作品梅花書屋圖一幅が國華大正十一年十一月號に載つてゐる。所藏者は波多野承五郎氏、款題に「丙寅嘉平月寫於矮梅居、介石陳人隆」とある。

文化五年は介石六十二歳であるが、この年の秋作つた那智三瀑の圖を後に金井烏洲が大坂に於て見たことを、その著無聲詩蛆の中に

書いてゐる。

余西遊、欲觀那智之瀑布、以遊具不足故不果、雖噬臍不能、以爲憾、後浪華客中、觀介石翁三瀑圖、覺酷奇、臨撫數過、稍得學步、徒附畫餅、以斷解衣之念、翁上題有詩、又寫而爲證云。屢探屢寫那智勝。三瀑奇勝最難寫。畫罷得否自不知。投筆嗒然問造化。戊辰秋日題、介石隆

介石の詩は、これが私の知ることを得た唯一のものである。

烏洲は介石を重じてゐた。その著無聲詩話の中には、「介石第五隆、仕紀藩、名于經濟學、側畫山水、筆意清遠、絕無渲染之跡、無近世甜俗畫師之習氣、又無丹青者流之陋弊」といつてゐるのである。介石の經濟學といふは、その吏人としての才管を稱してゐるのであらう。その方面は遺憾にしてこれを徵すべき資料がないが、つぎに畫家としての介石をいへるものは、語の一事肯綮に當れるを覺える。

江戸の大窪詩佛が詩を寄せて介石に畫を乞うたのも、恐らくまたこの年だつたであらうか。それは詩聖堂詩集卷十に、「贈矮梅老人求畫」として載つてをり、内容に介石の傳記を補ふに足るものはないが、詩としていかにも面白い。

南宗畫家論妙手。海内唯推第五隆。不知爲我許寫否。千里寄書遠煩公。不願落墨畫花卉。不願設色畫禽蟲。只願淡筆以渲法。收拾江山極精工。魚莊鱗舍參差接。茅屋柴門屈曲通。夾門疎松五六本。擁屋脩竹兩三叢。雲壓山頭天欲雪。潮吞浦口波生風。漁艇歸炊洲渚外。燈隔兼葭煙淡籠。此景詩中妄想耳。不知果能入畫中。我住城市塵滿臆。九轉金丹治無功。觀畫愈病古有例。倩君妙筆一洗空。君且莫惜爲我寫。寫成須速付郵筒。寫到斷橋流水處。梅邊宜著箇詩翁。

詩聖堂詩集十卷は奥附に文化七年正月發兌としてあるのであるが、

この詩はその卷十の中にあり、卷九には文化六年九月十五日の月蝕の詩のあるのを見ても、これは同六年の冬の作ではなかつたかと思ふのである。この詩はまた五山堂詩話卷七にも載せてある。介石詩佛の懇請を容れて、一圖を作つたのではないかと思ふが、それについては今知るところがない。

八

文化七年には、介石の一生に於て特筆すべき一事があつた。略年譜のこの年の條に、「上淡山、觀千手院所藏黃大痴天池石壁之畫幅」としてあるのがそれであるが、このことについては、淺野梅堂の漱芳閣書畫記續篇の記載が最も精しい。やゝ長くはあるが、全文を掲げておきたい。

余尹京兆日、得第五隆所摸黃公望天池石壁圖絹本、其外套隆自識曰、太痴道人姓黃、名黃望、字子久、別號一峰老人、元朝四大家之一也、元明以往準其畫者、不可枚舉、而得筆法、亦以爲寡、或摸形、或掬奇、猶以燕石比和璧之類、易足信哉、明清繪事專盛猶是、況於我邦畫學者不見黃之畫品者乎、余也夙志欽慕黃畫、普以搜索、而未得見之、居常以爲憾焉、適有和談山之支院千手院所藏天池石壁圖、曩時平安高孟彪與圓山應舉、相俱到於千手院、懇求瞻摹、以爲海內無比之珍、祕玩自誇、余屢乞孟彪而僅獲一見焉、卷舒數回、其畫位置得宜、筆力深厚、庸工非得作、然賦注稍覺有俗韻焉、親不觀其原本遺憾不輟、偶有交友浮屠泰舜之在豐山、感余篤志、百方周旋、而紹介山副某者、就談山長老、切索卒得所貸、今茲三月詣根來寺序次自携以到余齋、余也欣然展觀、則孺皮之所謂洵海內無比之珍也、峰巒草樹、一

丘一壑、悉盡造化之真態、殆如步於天池石壁勝佳境中、十狀萬態、各異其趣、神韻高尚不可言、嗚呼始識黃之妙手後人之不能追企、而始以爲稍有俗韻、摸者之粗、以石擬玉之類也、乃再拜燒香、敬摸謹寫、若其筆勢深妙、非吾輩之所企及也、子久時年七十有三齡、余亦既六十又四、縱令假十春秋習學不止、亦不能十之得一也、裝成積藏以祕玩、令後之學黃之徒觀此摸本、知余苦心、文化辛未秋七月第五隆識（分註。取意節文）如其摹筆、實藝精透、隆之山水畢用此法也

右は清宮秀堅の雲烟略傳に引くところに據つた。漱芳閣書畫記續篇は、未だその所在が知られてゐないのである。

介石が黃太痴の天池石壁圖を摸寫した顛末は右に據つて明かであり、介石のために泰舜といふ僧の力を致した事實もそれに據つて知られる。なほ四碧齋畫話には、介石より先に高芙蓉と大雅堂とが往觀したことになる。この條は蕪稿大雅堂遺聞の中にも引いたのであつたが、それは芙蓉と應舉との誤だつたらしい。して見ると大雅堂は天池石壁圖とは預らざることとなる。その談山に遊んだ事實は否定せらるべきであらう。

介石と天池石壁圖については、なほ香亭畫談上卷につきの如き記載がある。

第五隆號介石、南宗作家也、聞談山浮圖有黃太痴天池石壁圖、往臨之、前後十一幀、畫法大進焉、其後僧侶僑逸、寺塔衰廢、寶器多散逸、大痴幅亦落或人之手、後竟歸鳥尾得庵、其畫、中央作主山、下開天池、而石壁遶其左右、樓閣林樹、精彩入神、實稀世之珍也、別有介石臨本一幅、亦太妙、然以是照眞、滋見其峭峭不可尙也

介石が天池石壁を前後十一回摸寫したといふことは他に所見がな

いが、それには典據があるのであらう。梅堂の入手した一幅もまたその内の一だつたのである。そして摸本より摸本を作るに及んで、原畫に比して精彩を缺くに至つたのもまた止むを得なかつたであらう。黃太痴の原畫が明治年間鳥尾家の有となつてゐたといふことも、右に據つて始めて教へらるゝ事實であるが、圖は後更に同家を出でて、今は某富豪の藏に歸してゐるといふ。

賴杏坪が介石と交渉を持つたのもまたこの頃のことだつたであらうか。その春草堂詩鈔卷二に、「依菊池博甫覓介石翁墨竹、遙惠一幀、筆意精妙、實爲寶玩、因又請山水一圖、貪冒率易、不勝恐悚」として、つぎの一首が載せてある。

天下畫竹不成竹。往々竹身肥擁肉。久聆南紀介石翁。下筆自無一點俗。懇請遙獲三尺縑。高妙不入世人目。四五竿瘦勁如鐵。根生石罅節々磴。腕指到處心亦隨。枝葉活動天機足。當比與可描吳筠。嬋娟仰見滿壁玉。疑是湘妃廟前叢。所闕鸕鶿帶雨哭。南向再拜更致款。勿嗔小人復望蜀。聞君寫山勝寫竹。願覓一紙裝雙幅。

題詞に見えたる菊池博甫は、名を元習、號を西阜といふ。すでに述べた菊池衡岳の子である。その西阜を介して請うたとしてゐるのに據つて、私はこれは杏坪の江戸に出てゐた間のことであらうと想像する。杏坪は文化七年の秋より翌八年の夏へかけて江戸にあつた。そして詩集の右の詩の後に文化八年の元旦の詩のあるのを見れば、右の詩の成つたのは文化七年の冬の頃ではなかつたかと思ふのである。

九

翌文化八年介石六十五の歳に田能村竹田の訪問を受けた。略年譜にはたゞ「竹田來訪」とあるのみであるが、竹田自身はその師友畫録に、「予昔者南遊、毎日過從翁優遊終日、其文房之雅、園林之趣、器玩之致、飲膳之潔、使人頓忘身之爲客也」といひ、それについてすでに前に引いた窗前の竹のこと、矮梅のことを記し、更に「當時予獲翁畫數十紙、爾後朋友探筐取去、今僅藏北苑法秋景一幅」といひ、「近日都下祕重其跡、貴比南金、殆與大雅翁相埒矣」といつてゐる。更にその前文に於て、「嘗遊熊野、作九里八町卷、此其平生最得意筆也、今藏其家」ともしてゐる。竹田はその九里八町卷を往訪の節見たのであらう。但し今その所在については聞くところがない。師友畫録は介石の歿後五年の天保四年に成つたのであるが、竹田はまたその山中人饒舌に於て、南遊を終へて京都に歸つた時、人の必ず介石南嶠の兩人を問うたことを記してゐる。南嶠名は弘美、字は世興、また紀伊の畫人で、介石との合作などもあるといふ。

以上は略年譜と竹田莊師友畫録とに據つたのであるが、私はなほ竹田の和歌山に介石を訪うた時日を知りたくて、木崎好尙氏の著大風流田能村竹田を検したところ、それはこの年七月のこととして敘述してあつた。その七月と推定せられた理由は明示してないが、それに従つてよいであらうか。但しこの介石訪問については、

野呂介石傳の研究(二)

他に新資料もないらしく、内容は師友畫録以外には及んでゐなかつた。

なほ竹田の屠赤瑣錄卷六には、介石より聽くところの話數條を記してゐる。これもこの年往訪の折に耳にしたのであらう。

この年介石の作るころの春景山水圖一幅が故法學博士三瀨信三氏の所藏の内にあり、その玻璃版が國華昭和三年八月號に載つてゐる。落款に、「辛未閏春寫、第五隆」とある。

同じくこの年の狗啼山圖といふものが書畫大觀に收てあるが、その自題が私等の興味を惹く。

往歲冬日、余與二三同好、詣泉南狗啼山溪、探勝槩、他日漫圖其趣、畫旨拙醜、自不堪愧、棄擲篋笥、適有竹雅彥拾之、裝以索題、其好事之厚、改寫以欲似之、老懶怠慢、不可奈何、卒不慮仿學之慙、題名款以還之、辛未夏六月書於矮梅居、介石第五隆。

介石はすでに耳順を踰えながら、なほ己の作品に不満を感じてゐたのであつた。狗啼山は泉南郡の犬鳴山である。有竹は介石の高弟の一人だつた。

なほこの年八月に成つた介石の山水圖一幅を相見香雨氏が所藏せられてゐる。上に「霜葉落欲盡。晚山看更青。躡將沙陰履。坐久水邊亭。俛仰已如夢。漂搖同泛萍。稻梁非可戀。黃鶻思冥々」の一詩を題して、「辛未秋八月寫於矮梅居、介石第五隆」としてある。

文化九年は介石六十六歳であるが、この年は嘗て介石を訪うた長町竹石の七回忌に當つたところから、追薦の書畫展觀の會が忌日の九月十五日に高松に於て催された。その時の目錄が竹石翁小傳に附

九

載せられてゐるが、紀伊國の條の始に「水墨秋山霜霽圖（分註。併道樟小序、絹本）野呂介石」とあり、つぎに「淡彩綠陰晴晝圖（註。絹本）野呂隆忠（分註。介石之男）」とある。介石も依頼に應じてその作品を寄せたのである。

其の後數年はまた記すべき事實がないが、家譜文化十二年の條に、「同十二年三月七日、御書院番格被仰付、御足高五石被下」としてある。本年介石は六十九歳だつた。

この年晩春初夏の候に江戸より歸國する菅茶山を迎へた大阪の篠崎小竹は、所藏する介石の那智瀑布圖に贊を請ひ、茶山はために一詩を題した。それは黄葉夕陽村舍詩後篇卷六に、「第五隆畫那智瀑布圖、爲篠崎承弼題」として載せてある。

熊野瀑布多畫人。按圖懸想竝非眞。第五紀人目所熟。況乃舐毫稱有神。怪岩古木如有響。杯盤席上夏生寒。其地絶險在偏陬。都人舊來往遊難。要知飛流千尺壯。好就梅花書屋看。

その翌文化十三年は介石七十歳であるが、この年に作つた畫の落款の模寫が古畫備考に載つてをり、それに「介石老人時年七十頭髮悉白」とある。介石の畫像の有無については私は知るところがないが、右の一語に據つて、風貌の想像せられて來るものがある。

なほこの年介石の古稀を祝して、諸家から畫を寄せ來つた。それらは装幀せられてゐたらしいことが四碧齋畫話に據つて知られるが、現に傳へられてゐるかどうかを知らぬ。

この年頼山陽が介石の畫に題した一詩が山陽詩鈔卷一に載つてゐる。「石翁皴染貌孱顏。品在倪迂范緩間。南海由來多秀絶。不知粉

本是何山。」題には「題介石居士畫山」とある。山陽のこの詩の題せられた介石の畫は、現に和歌山の掛下彦十郎氏が收藏してゐるといふ。それは雜誌「山陽と竹田」昭和八年七月號に出でた奥田草山氏の「頼山陽と野呂介石」第四回に據つて知るところである。

十

その翌文化十四年は介石七十一歳であるが、この年五月十二日に作るところの茅屋閑居圖が、國華社發行の南畫集に載つてゐる。上に歐陽修の茶歌の七言古詩を題して、「丁丑竹醉前一日畫第五隆」としてゐるのであるが、その書が秀潤を極めてをり、介石の書にも敬意の表せられるものがある。圖は上野理一氏の所藏に係る。

その翌々年の文政二年、その七十三の歳に介石はまた加増を受けた。家譜に「文政二卯年八月廿六日、御足高御加増二十五石に被仰付」とある。この年介石はまた藩侯より書を賜つた。略年譜の本年の條に、「藩主賜親筆書、自是號四碧齋」としてある。その親筆といふは、「山色四時碧」の五字の一行物で、介石の那智山圖を觀て感賞のあまりに賜うたのであつた。介石の四碧齋の號はこの語に由來する。四碧齋落款の作品はこの年以後のものになるのである。

この年七月に介石の作つた那智群山圖が日本畫大成第三十三卷の中にあり、これもまた介石の老いて衰へざる手腕を窺ふに足るべき大作であるが、遺憾にして寫真がや、鮮明を缺いてゐる。落款に、

「那智群山圖、倣太癡道人天池石壁圖意、文政二年孟秋寫、矮梅第五隆、時年七十三」としてある。所藏者は八田兵次郎氏とある。

翌文政三年介石七十四の歳には、「著臺嶽跡略記」といふ一事が略年譜に記してある。既述の帝國圖書館本には奥書はないが、この年の介石の識語のある本が或は存するのであらう。圖書館本は、目錄には「大臺山登臨涉歴之記要」といふ題名で出てゐるが、これはなほ諸種の書名でも傳へられてゐるやうである。

この年介石は山陽と小交渉を持つた。山陽の文政三年九月二十三日雲華宛の書簡の中に、「長卷之評判愈高御座候。野呂介石より畫を見度と申來、刻畫無鹽、唐突西施に候」としてゐる一節がある。長卷といふはその前年文政二年に山陽の描いた耶馬溪圖卷であるが、介石はそれを見たくて、和歌山よりわざわざ京都の山陽に乞ひ來つたものらしい。介石と山陽との交渉は、現に知られてゐるところではこれを最初とする。この年山陽は四十一歳だつた。介石より少きこと三十三歳である。

ついで一箇月後の十月二十一日に、山陽は美濃の江馬細香へ宛てて一書を裁したが、その中で、「紀州介石老人へ索畫候所一幅投來、私の墨戲をも見度とて、此間遣候處、頗歡賞致吳候。其返書今日着、又一小横卷を書くれ候。几上披玩する程のもの、扱々懸御目度ものに候」としてゐる。これに據れば、最初は山陽から介石に畫を所望し、介石はそれを贈るにつけて、山陽の耶馬溪圖卷をも見たいといつたのであらう。それに答へて山陽の贈つたのは、耶馬溪の圖であ

つたかどうか明かでないが、介石はそれを稱贊した上に、更にそれに報ゆるために小さな横卷を作つて贈つたのであつた。細香にこれを見せたいといつてゐるのを見れば、その圖は山陽の意に適したものである。

介石から畫を請はれたことは、山陽の大いに得意とするところだつた。ついでまた十一月十四日附で堀田東湖に宛てた書簡の中でも、畫作のことについて、「紀州介石大に許してくれ候て、自身も書いてくれ、私へも所望、汗の出る仕合、此節大に困窮仕居候」などとしてゐるのである。但しその大いに許したといふ介石の山陽宛書簡も、山陽よりの介石宛書簡も、共に今見ることを得ないのを遺憾とする。以上三通の山陽の書簡は雜誌「山陽と竹田」昭和八年十月號に據つた。頼山陽書翰集には宛名の堀田東湖が向藤左衛門となつてゐたりするが、それは誤だつたのであらう。

なほ右の介石の畫幅のこの見えてゐる書簡一通が、頼山陽書翰集續篇の「年代未考」の部の内に收められてゐる。それは雙林寺長喜庵の月峰に宛てた九月二十二日附のもので、月峰が催さうとする書畫展覽の會へ、自作の畫と介石の畫とを出品することを芝居がかりで述べてをり、「然ば明朝は例の御芝居、青田同様之場ふさげ爲持上申候。其上對幅にて、介石と云藝者つれて參申候。貳人前出さねばならぬ筈之所、壹人前よりは上不申候。手打連中之かほと云うぬばねなれ共、よろしく奉希候」としてゐるのである。或はこの書簡も上記の三通と同じく文政三年のもので、山陽は介石の幅を入手し

た悦に堪へず、早速それを月峰主催の書畫の會へも出陳したのではあるまいか。なほ後考を俟ちたい。

文政六年その七十七の歳に、介石は美濃の人村瀨秋水の訪問を受けたかと思はれる。これは岐阜縣教育會編濃飛偉人傳所載の秋水の傳に、「年三十、紀伊に到り、野呂介石の門に入る」とあるのに據つた。秋水は寛政六年に生れて、この年三十歳だつたのである。右には介石に入門したやうになつてゐるが、但し恐らくは面晤して畫道を問うたといふに止まつて、滯留して指導を受けたのではなかつたであらう。石亭畫談に據れば、初め秋水は京都に中林竹洞に會つて教を乞うたが、竹洞はたゞ技巧の末を云々するのみで、その意に満たなかつた。ついで、紀伊に介石を訪ねたところ、介石は秋水の畫を一見して、足下の畫は技巧はすでに成つてゐる。この上は自然の實際に就いて、親しく雲烟の出没の狀を窺ふがよいといつた。秋水は大いにその言に服したといふ。この一事は、四碧齋畫話に見えたる介石の語と對照しても、信を措くに足るものがある。

なほ石亭畫談には、秋水が介石の家を訪うた時、數人が内で武術の稽古をしてゐるのを見て、始めこれが果して介石の邸かどうかを疑ひ、後に介石の武備あることまたかくの如きかと驚嘆したといふ逸事が載せてある。それには秋水が「弱齡にして」紀伊に介石を訪うた時のこととしてあるが、弱齡といふは誤で、これも右にいふ文化六年のことだつたのであらう。

介石自身武事にも練達してゐたかどうか、他に聞くところがない

が、南紀徳川史の伊藤蘭嶋の條には、蘭嶋が眞田幸村の遺愛の塵拂といふ太刀を佩刀としてゐたこと、歿後それが典物となつてゐたのを介石が購つて所持してゐたことなどが記してある。かやうな事實を以てしても、介石がただの畫人ではなかつたことが知られよう。

介石のこの年に描いた夏山圖が、南宗名畫苑第十三輯の内に收めてある。題語に「文政癸未夏四月、法王右丞雪裏沒骨畫、爲夏山綠圖、以似一粲、四碧老人隆」としてある。所藏者は和歌山縣濱口吉右衛門氏である。

この年福岡の人大熊言足が伊藤常足と共に京阪その他に遊んだ時の日記があつて、大熊言足紀行と題せられてゐるが、その大阪滞在中の五月十六日の條の中に、「夫より百貫町にいたり、高島雲溟をとふ。心ちあしくとて打ふしたれど、さきつ「頃？」良山のもとにて知人になりゐたれば、つとめてあはる。此人書をよくす。詩畫もかつくでくる。紀州介石翁の畫久しく乞おきたるに、やう／＼このごろできたりぬとて、紺本堅物山水を見せらる。畫體閑雅、甚渴望せらる」としてある一節がある。高島雲溟は未だその人を知らない。良山は二年後に紀伊に介石を訪問する阿部縑洲である。

十一

文政七年は介石七十八歳である。この年に成つた溪閣松聲圖が、國華社發行の南畫集に載つてをり、落款に「七十七叟碧道人隆」と

あるのであるが、その構圖の精緻驚くべきものがある。介石は作畫の上に衰を見せなかつたのである。この圖は嘉納治兵衛氏の所藏としてある。

この年秋、頼山陽が紀伊に遊んで介石を訪はうとしてゐた。閏八月三日に小竹に宛て、裁したその短簡の中で、母に和歌浦を見せようかと思つてゐるといひ、「それに付小米、南州同伴、訪介石可申との舊約あり、小米に御逢ひ被成候はゞ御訂し可被下」云々といつてゐる。南州は知らぬ。小米は米山人の子岡田半江である。これに據れば、山陽はすでに以前より介石を訪問すべきことを約してゐたのであつた。但しこの年の紀伊行はつひに實行に移されず、翌八年に赴くことになる。右の山陽の書簡は、木崎好尙氏編新選山陽書簡集所載のものに據つた。

文政八年その七十九の歳に、介石は頼山陽、篠崎小竹、阿部縑洲、雲華大含等の一行の訪問を受けた。略年譜に、「山陽雲華來訪、山陽贈詩」としてある。

この年三月山陽はまだ六歳の幼童だつた次子辰藏を失つたところから、一にはその憂悶をまぎらさうとして、翌四月十九日に京都を立つて、紀伊に遊んだのであつた。その介石訪問のことは、歸京後廣島の母へ宛てた五月朔日附書簡の中で、「紀州に介石老人有之、七十九翁に候へども、相應に優待被吳候。晝は不敢請に歸申候」といつてをり、更に同じく母に宛てた六月三日附書簡に於て、「介石は七十九老人、居ナガラニ便をトリ候位に候。私なればこそ快く逢候事、

畫など無心頼れ候仕儀に無之、篠崎は木を一本、山の様のも少許、大含は山の様のもの二ウネリ、皆紙は一尺餘方に候。私は何もなし」としてゐる。して見ると、この頃介石はすでに行歩の不自由に陥つてゐたのであつた。山陽の贈詩は「訪介石翁、酒間賦贈」として山陽詩鈔卷六に載せてある。「繩牀扶病笑欣然。吏隱高齋松竹邊。微仲娛情非麴蘗。大痴得壽是雲烟。筆端自有金剛力。墨派原非神秀禪。吾亦忘年同臭味。晴窓論畫且留連」とあるのがそれである。しかしこの詩は實は題詞に記されたる如くに席上で成つたものではなかつた。頼山陽全書の詩集中に收むる岡南連翼には、「介石老人喜吾輩至、買酒留歡、席上欲有所贈、而不果成、歸途成、錄似雲華師、猶有不安當處、俟他日商量」としてこの詩が出てゐるのである。しかしその成つたのはいつだつたのにもせよ、「繩牀扶病笑欣然」といひ、「晴窓論畫且留連」といつてゐるのに據つてその時の狀況が偲ばれる。

岡南連翼にはその一首について、「是日翁出示其嘗寫□楚峽中圖横卷、因題」として、つぎの一首が出てゐる。「此去熊山六日程。梅天討勝計陰晴。頼君一卷雲烟筆。不用青鞋布襪行。」この詩は詩鈔には收めてない。

それについてなほ岡南連翼には、「乙酉孟夏廿四日、歌山逆旅、松廬老兄戴酒訪雲華師、出此數紙索點染、前半既成、閣筆將去、余醉腕技痒、援筆續成、篠承弼自傍罵曰、狗尾狗尾、余曰、爲貂爲狗、任汝呼之」としてある。山陽等が介石を訪うた後で、更に介石の姪松廬が山陽等を旅宿に尋ねて、畫を作らしたためたのである。

この時の雲華の詩は、「訪介石老人」として、昭和八年に刊行せられた雲華上人遺稿に載つてゐる。「丘阿南探勝。便問傾人寬。爲畫移吳竹。知心指楚蘭。城居如在野。吏隱不論官。碧樹重圍處。行盃姑侍歡。」

なほこの行に、雲華が山陽より贈られたところの耶馬溪圖卷を持參して跋文を請うたのに對して、介石は短文を書して與へた。それはまた雲華上人遺稿に附載せられてゐるが、その跋文の附記に、「昨廿四日、所藏此卷雲華上人、及山陽小竹二先生偶然見訪弊廬、談笑數時、盡平常之素懷云、文政乙酉四月廿五日識於介子軒、七十九歲老人隆」とある。これによつて私等は、山陽等の介石訪問が四月二十四日だつたことを知るのである。

右耶馬溪圖卷の題跋は、田能村竹田、菅茶山、小原梅坡、梶原藍葉、市河米庵、佐藤一齋、菊池五山、古賀穀堂、篠崎小竹の九人の後に介石が書し、その後を更に頼杏坪、梁川星巖、大窪詩佛が書し、貫名海屋を最後として終つてゐるのであるが、海屋はその文中に、「至諸名家題跋、實當今之選、而所謂踵事增華者、而其文之一齋先生、書之有介翁、又其薨薨者矣」としてゐる。すなはち海屋は、題跋中文は一齋を推し、書は米庵を挙げず、杏坪詩佛を挙げずして介石を推してゐるのである。介石の書はその道に造詣することの特に深かつた海屋の認むるところとなつてゐたのである。

十二

山陽等に從行した阿部維洲もまた詩を介石に贈つた。「繞膝輕絹白雲堆。胸中邱壑一揮來。要知此叟師傳處。曾泝熊谿五十回。」この結句は介石の話中の語をそのまま、用ひたのであつた。この詩は諸書にはたゞ後半だけが引いてあるが、天保三十六家絶句に據つて全句を知ることを得た。題には「呈介石先生」とある。

介石が晩年行歩が困難で、兩便までも虎子を用ひてゐたことは四碧齋畫話にも見えてゐるが、世上で介石の病氣を中風のやうに取沙汰してゐたのを介石は否定して「疝の積」だといつてゐた。しかし病氣は何れにもせよ、その中では介石は、痛苦を忍んで畫筆を執つてゐたのだつた。その中には主君よりの命に依つて描くものもあつた。介石は、畫を以て命を報ずるのもまた公事だといひ、息の根の通つてゐる間は、畫事は捨てぬといつてゐたのである。そのことは四碧齋畫話に見えてゐる。介石の精神力は、まだまだ衰へてはゐなかつたのである。

同行者の今一人の小竹については私は知るところがなかつたが、木崎好尙氏が頼山陽全傳に引くところのその「頼氏所藏介石山水卷」の文に據つて、介石が老病のため、床上に客と應對したこと、山陽が傍へ寄つて山水を描いて教を乞うたところ、介石は笑つて「妙々」といつたこと、酒間に山陽が詩を賦さうとして、「徵仲娛情

非麴蘖。大痴得壽是雲烟」の一聯を得て、「翁は酒を飲まなくて長壽なのですから、この故事の使ひ方は的切でせう」といつたこと、しかし前聯には「金剛力」の三字を用ひようとしてその對が得られず、歸京後に作上げて贈つたこと、介石はために山水の圖卷を作つてこれに酬いたこと、席上介石が小竹に向つて、わが國には佳紙に乏しい。もしこれを得たならば、足下のために長卷を作らうといつたこと、歸阪後小竹は人に託して、舶載のもの數幅を贈つたところ、介石の大いに喜んだこと、山陽に贈つた圖卷はその紙を用ひたらしいこと、小竹への長卷はつひに來なかつたことなどが知られる。それについて小竹は、翁は約に背くやうな人ではない。或は人に奪はれたのであらうといつてゐる。右頼氏藏圖卷の跋文は、嘉永二年に作るところだつた。小竹の文稿は今全部が某古書肆に出でてゐる。今の小竹の文もまたその中にあるのであらう。

頼山陽全書の所引の文に據つて、新事實の多くを知り得たのであるが、同書には山陽等の介石訪問の時日をたゞ「四月日」とのみしてゐる。これは前掲の介石の記文に據つて「二十四日」とすべきである。

山陽等の介石訪問については敘すべき事實が多かつたが、なほその後日譚として一事の附記すべきものがある。山陽が介石の目前に畫筆を揮ひ、介石がそれをよしとしたことは既述せる如くであるが、山陽はその畫を持歸つて、介石歿後四年になる天保三年に、更に補筆を加へた上、舊作の七絶一首を題してそれを門下の藤井竹外に贈

つたのであつた。その詩と附記とはつぎの如くである。

紙筆寧追畫匠群。研池剩墨愛清氣。撐腸書卷爲何用。結作蓬々幾幅雲。此幅七年前試畫于介石翁前、以乞其是正、携歸投在篋底、今略加點染、併題以贈強哉、襄

強哉はすなはち竹外の字である。この自題は、私は雜誌「山陽と竹田」昭和八年八月號に載する奥田草山氏の「頼山陽と野呂介石」に據つて知つたのであるが、その畫は現に倉敷の大原家に所藏せられてをり、右「山陽と竹田」に介石の無款の山水圖と共に口繪になつてゐる。

山陽が紀伊に介石を訪うたことはよい思出となつたであらうが、和歌浦の風景に對しては、山陽は歸京後口を極めてこれを罵倒した。しかるに山陽等の紀伊往訪より三十五年を経て、萬延元年の春同地に遊んだ伊勢の齋藤拙堂は、和歌浦玉津島の風光を賞して、卻つて山陽のこれを認めなかつたことを怪しみ、更に當時のことを知つてゐる或人の談話を記して、その時山陽は紀三井寺に古畫を藏する由を聞いて、介石と共に到つて一覽したのであつたが、しかもその内には見るに足るものがなく、假山水に對する不滿よりして、つひに眞山水をも併せて唾棄したのであつたとしてゐる。しかしその時介石が行歩が不能で床上に在つたことは既述せる如くであり、この或人の談話といふものは信せらるべくもない。或は山陽が紀三井寺所藏の畫に失望した事實はあつたとするも、介石の同觀したといふ一事はこれを否定すべきである。

小竹は「頼氏所藏介石山水卷」の一文に於て、介石を以て約に背くやうな人物にあらずとした。この一語を以てしても介石の人物の善かつたことが知られて来るが、京都の梅辻春樵は、介石の門下だった紀伊の濱口某のために、その藏する介石の未完成の畫帖に跋し、その後文に於て、「先是欲獲老人之一畫、价雲山請之累年、無音耗、竊以謂老人惜其高手、不容易以眎人、今觀其土人之尊尙老人、猶潤州之米海岳、雖殘紙戲墨、亦以爲傳家之寶、則前不落窮措大之手、固其分歟」とした。しかるに介石は濱口生に依つてこの跋文を見て、直ちに一圖を作つて春樵に寄せた。春樵は驚喜して、それにまたつぎの短文を題したのであつた。

予嘗爲濱口生、跋介石老人小景、其言諷刺老人之祕惜其技、生以眎老人、老人遽作此圖、見贈、可知其溫厚之人、而非敢矜誇自高、前言之不謹、曷堪慚汗、頃日命爲立軸、懸之齋頭、一日十數拜矣

この二文は共に春樵の遺著古桐餘韻集に載するところであるが、介石の溫厚篤實の人物だつたことは、事實春樵のいへるが如くだつたであらう。

なほこの頃介石の畫名のいかに高かつたかを語つてくれる文獻が一つある。それはこの文政八年二月七日に、田中芳樹こと後の近藤芳樹がその保護者ともいふべき關係にあつた周防國大道村の上田五郎右衛門に宛てた書簡の一節で、「介石の畫之事も仰越候へ共、中々手に入事に而は無御座候。極々わるき所が百疋二百疋、よき處は一兩、其餘も仕候。物次第にては二兩も三兩も仕候由。私事此人之甥

にて野呂九助と申儒者とは懇意に仕候へ共、介石老人には未だ對面仕らず、息子も候へ共、一寸逢たるのみにて、心安きと申程にては無御座候。介石のはかへりて國にて御買得がよろしからんか。それでも達而と被仰候ば、いかにしても調進可仕奉存候。此義いかゞ」とあるのである。右は吉田祥朔氏の教示を得た。芳樹はこの月和歌山を去つて大阪に出でてゐるのださうである。(つゞく)

附記 第十章に記した八田兵次郎氏所藏の那智群山圖はすなはち本誌前號圖版に紹介されたものである。